

# 女体百景・ゆうれい女

細川 董 （たなす） △文とえ／哲学者▽

神戸は三宮の、海岸通りのビルの谷間に女が出るという話はかねて聞いていた。

ところが、八月の某日、

六甲山上での講演の帰り道、私の運転する車の中で、

世話役のK子嬢から

「先生、私のマンションのビルの前に、毎晩、十二時頃になると変わった女が出るの知つてはる？」

「……」

「それが面白いのよ。私が帰る十一時頃に、ちょうど化粧してゐるのよ。入口のポストボックスの前で」

「どんな女？」

「もう大分ええ年よ。そやけど私ら女にはあんまり顔見せへんのでよく分からへんわ」

と、聞いたとたん私はハタと思い当たるふしがあつた。

△ひょっとして、あのオバケ女では？▽

オバケ女ともユウレイ女ともいふのである。このさい

特に私は区別する必要を認めない。

もちろん多少のニュアンスの違いはある。

しかし、要するに「目見て」「ハツ」とさせるようないわゆる「出た！」ないし「あつ」とのどまで出かかる、

あの、この世ならざる幽氣というか妖氣というか、そういう雰囲気をもち、とくにその目つきでそう感じさせる

のが、私のいうオバケ女ないしゆうれい女なのである。あの、またたきもせぬ、じつとみつめる青い目を見る

と現世からあの世へ連れてゆかれそうに思うのである。あの世といわなくとも、どこかこの世ではない別の世

界へ吸い込まれそうなのである。

オバケ女は、最初からこちらを見ない。

まばたきもせず、どこか一点をじつと見つめているのだ。まるで人形のようだ。それだけ不気味なのである。

△もし、あの目でこちらを見つめられたらどうしよう▽

という恐怖心をこちらへ与えるのである。

オバケ女といつてしまえば、子供っぽすぎたいい方になってしまうし、ゆうれいといつてしまえば、しとやかす

ぎる。骨ばっているから。お分かりいただけますかな？

ゆうれい女は、もちろんやせている。色あさ黒く中高年エキゾチックな顔立ちだ。それなら美貌かというと一

概にそうともいえない。一見、美貌と見ることも出来る

場合もあるが、よく見るとそこはゆうれい女！

まゆが下がり、目尻も下がり気味、やはりゆうれい顔

である。

△一辺、今晚でも見てみやはらへん？ 今からやつたら

ちょうど、ええ時間になるし』

と、K子嬢にけしかけられるまでもなく、私は

△そら、ぜひ拝顔の榮に浴さなあかんねえ

と、持前の好奇心の虫がつぶやいた。

△そやそや。そら何でも見たり聞いたり試したりせな。

アタック精神が肝心よ。また、女体百景が一つ書けるかもしけへんわよ。先生？』

△ほんまや！』

と、その時答えた通り今、こうして「ゆうれい女」を書

いている次第である。実は、私にとつてゆうれい女には因縁話があるのでだ。



細川家は、親子二代にわたってゆうれい女にたたかれているのである。私がまだ学生時代で、親父は女専の教授をしていたのだが、某ゆうれい女にほれられて、その追いかかけ回された様はスマジイものであつたことを思ひ出すのである。

父が、朝出ようとすると突如、彼女の襲来を受けた玄関でつかまりおふくろの手前を取りつくろうのに困り果てていたことがあつた。

おやじは、駅で待ちぶせるようになつた彼女をさけるのにも苦労していたようだ。しかし、駅で会えないと知つた彼女は、夕方わが家の玄関先で、何時間も父の帰りを待つようになった。しかも時々しくしく泣くばかりで家族には訳のわからないこともあつた。やがて彼女は来なくなつたが、彼女が50、60歳になるまで長文のラブレターは一年に何度かわが家のボストに投函されたものである。ゆうれい女は、要是シツコイのだ。それは人事ではなかつた。ゆうれい女には好みがある。ひたいが、ハゲ上がつてお腹のでっぷり出たタイプが好きらしい。

「先生！、私の好きなタイプだわ。好きになつたらどうしよう？」

というのが、私が最近出会つた若いゆうれい女の初対面のせりふであつた。妻帯者にとつてしまふ、ほれられるということは、複雑である。よしあしである。うれしいに違ひないのだが、ゆうれい女は、

「奥さんと別れて、私と結婚してちょうだい！」  
といいかねないのだ。

「もうそろそろ彼女の出る時間やわ」と助手席のK子嬢。車はもう問題のビルの谷間についていた。「いるいる！」とK子嬢の興奮した声。

たしかに、ゆうれい女はK子嬢のマンションの入口でうつむいてビリ動きもせず一点を見つめて立つていた。やせた白いワンピース姿が、いたいたしかつた。顔はくらくて定かでない。△ゆうれい女▽  
私は、しようこりもなく車を降りてK子嬢に続いた。

兵庫県肢体不自由児協会創立20周年記念

# あひるの靴 アンデルセンの一生

作・水上 勉 脚色・小松幹生 演出・水上 勉、宮永雄平

「私の生涯は一編の美しい童話である」  
デンマークの貧しい靴屋の息子に生まれた童話の王様、  
小鳥や虫たちに天真に語りかけた詩人、  
ハンス・クリスチャン・アンデルセン  
薄幸な生を受けた少年の  
心の軌跡……



9月24日(水) 11:30開

9月25日(木) 11:30PM/6:00開

兵庫県民小劇場

2,000円

24日は水上勉の講演と演劇

25日は演劇のみ(2回公演)

●神戸っ子読者 5名様をご招待

ご希望日を明記のうえ、神戸っ子編集部までハガキで

●神戸っ子 読者 割引優待致します

電話でお申し込み下さい。2,000円を1,800円に割引

主催/(財)兵庫県肢体不自由児協会 ☎241-9907

後援/神戸新聞厚生事業団

ハイセンスの紳士服で  
最高のおしゃれを



## 三恵洋服店

神戸・元町4丁目 ☎(078)341-7290

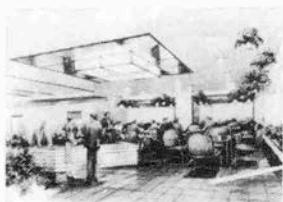


★三宮センター街の  
カラー舗装工事進む

三宮センター街1丁目の  
カラー舗装工事が、ポート  
ピア'81に向か、山田工務店  
の施工で、月中旬完成を  
目指して進められている。  
以前のタイルに比べて、  
インドの赤い花崗岩と小豆  
島の白黒の御影石を敷きつ  
めた様は、赤い絨毯のよ  
う。非常にかたい石を使っ  
ているので、半永久的なも  
のになる予定。「とても歩  
きやすくなつた」と好評。

「神戸の表玄関といわれ  
いるセンター街だけに、神  
戸にふさわしい顔を作りた  
い」というのが山田理事長  
の考えだ。

★オリエンタルホテルに  
シティ派コーアヒーハウス  
オリエンタルホテル1F

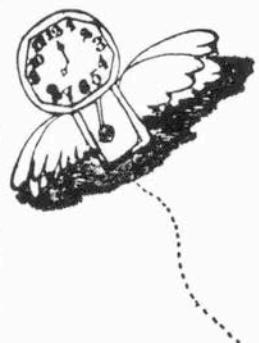


シティ派のコーヒーハウス  
「ELITE SEVEN」

また8月に、二階大宴会  
場の内装と三階の改装が終  
了した。三階は客室を小集  
会場に変え、小会議、20名  
程のパーティ、見合い等に  
利用できるようになつた。

場の内装は、外装の設計を担当し  
た武田則明さんは「ウネの  
町一番街の老舗ウネが今月  
月中旬装いも新たにオープン  
する。

「新しい器に長い歴史」  
をキヤッヂフレーズに、元  
モダニズムの木肌を基調に明るく、男  
性的なムードの店に」と設  
計のネライを語っている。



★大丸前「ヨシオカ」新装  
はクラシカルモダンに  
神戸の手づくり靴の大丸  
前「ヨシオカ」(吉岡潔社長)  
が、シンヤクドーの後を買  
い受け、倍の広さで九月十  
二日オープンする。

トラバー  
チとガラス  
木を扱った  
クラシカル  
モダン調。



ヨシオカ改装完成予想図

●シヨツブトビックス  
★きもの工芸 ちんがら屋の第54  
回秋の珍品会が、9月12日から16日までセントー街店、二階サロ  
ンにて開催。同時に佐賀県作家の  
野村静枝作品展も開かれます。ど  
うぞご覧ください。

★呉のみよしや「秋物豪華展」  
を9月12、13日、農業会館11Fに  
て開催。きものファン必見。

★六甲オリエンタルホテルのさわ  
やかパックはいかがでしょうか。  
期間は9月7日から9月30日まで。  
1泊2食、お一人8,000円(税  
込)で予約は2名以上で受け付  
けています。ご利用下さい。

★画材・額縁の木箱製額が9月2  
日・3日、農業会館11Fにて、第  
3回額縁・絵画総合見本市を開催  
します。出展品目は、油絵・色紙  
額・油絵・複製画・掛軸など。  
★婦人靴のジョアンナ(サンブラン  
ザ1F)が、9月13日改装落成  
いたします。大理石を使い、落ち着  
いたムードのインテリアで、アダ  
ルト志向の店へイメージシエンジ  
ングをかります。姉妹店ブティック  
ジョアンナセントーブラザ2F  
も改装、9月1日オープンしま  
す。神戸っ子に合ったハイセンス  
なファッショントを選びで下さい。

★リザ・サンロン神戸本店(セント  
アラソン)にて9月7日1PM、4  
PMの2回、「80's初秋冬ファッ  
ショショウ」を実施します。一  
マは「秋」、シンプルに、そして  
モダンに「秋」のファッショントを先  
取りして下さい。

★カスカードよりパンの新製品の  
お知らせ。ソフトマロンは女の子  
に大人気のマロントアーモンドの  
ハーモニー。¥120 ソフトレ  
ーズンはラム酒づけにしたかわい  
いレーズン入り。¥100 ソフ  
トショコラは、上にがみが効いた  
ショコラート、そしてホワイトチ  
ョコレート。¥100 つぶぶつづ  
いたソフトクーベル(さん  
プラザのみで販売) ¥100



新谷英子さん  
壁面を、  
パラ色の  
イタリア  
産大理石

誕生日  
ありがとう



★生活文化の創造めざして

兵庫県芸術文化祭

県では多くの県民にすぐ  
れた芸術を鑑賞し創造活動  
に参加する機会を提供する  
ために、毎年秋に芸術文化  
祭を催しているが、今年は  
左記の日程で行われる。



丹波夜能



血液センターで  
ご夫妻

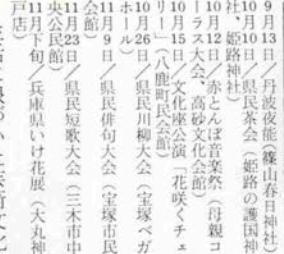
★皇太子ご夫妻、献血大会  
に出席のため来神

献血を国民運動として更  
に発展させるため、第十六  
回献血運動推進全国大会  
(厚生省、日赤、兵庫県な  
ど主催)が全国各地から二  
千名の参加者を集め、7  
月23日神戸文化ホールで開  
催された。皇太子ご夫妻  
は、この大会に出席した  
来神。県赤十字血液セ  
ンターで視察の後、大会に  
出席され励ましの言葉を述べ  
られた。大会終了後、お  
二人はオープンしたばかり  
のグリーンピア三木で一泊  
され、翌日帰京された。

建設中

の三宮タ  
ーミナルビル予想図  
の三宮タ  
ー(ミナル  
ビル(国  
鉄三ノ宮  
駅ビル)  
の地下2  
階から地  
上3階までを店舗にする予  
定で、婦人衣料を中心にな  
性が楽しく買物できる店づ  
くりをねらっている。

生活に根づいた芸術文化  
の振興をはかるのが目的と  
いうこの芸術文化祭、更に  
多くの県民の参加を呼びか  
けている。



9月13日/丹波夜能(藤山春日神社)

10月10日/県民茶会(姫路の護国神社)

10月12日/赤とんぼ音楽祭(母親ゴ

10月15日/高砂音楽会(花咲く子)

10月26日/県民川柳大会(宝塚ベガ

11月23日/県民短歌大会(宝塚市中

戸店)

11月月下旬/兵庫県いけ花展(大丸神

戸店)

11月23日/県民短歌大会(三木市中

央公民館)

11月23日/兵庫県いけ花展(大丸神

戸店)

11月23日/県民短歌大会(三木市中

央公民館)



ロスと並ぶ世纪末三大画家の残る一人であるフェリシアン・ロップスの画集もこの秋に出来る。世纪末の頽靡と悪魔主義を代表するといわれれるロップス画集の出版はその道の爱好者にとって待望久しかったものだ。

ネズミが出会い、毎週月曜の夜に彼ら二人の語らいが始まります。――16の短篇からなるこの物語「放課後の時間割」には、子供たちへの温かい眼が底にすえられて、読後非常にさわやかな気分。大人にもぜひ読ん

★水上勉主宰劇団三蛙房が  
神戸でも旗上公演  
 勝利兵庫県肢体不自由児協会  
 会では、創立20周年記念行  
 事として、9月24日と25日  
 に作家の水上勉さんが主宰  
 する劇団三蛙房の「あひるの  
 の靴——アンデルセンの一  
 生」を上演する。劇団三蛙房  
 房では、東京に車イス劇場  
 を作ろうという運動を起こし  
 てほしい。  
 借成社刊・780円

し今回の芝居は旗上げ公演。日本各地4カ所で上演する。神戸では同協会が引き受け、友生養護学校と垂水養護学校の生徒たちを招待する。

「あひるの靴」アンデルセンの舞台。水上勉脚色。小松永平監修。演出：水上勉・宮永雄平。原作：草村実美。吉左根田恒夫。脚本：辻彦彦。9月24日(水)1時半。25日(木)1時半。6時。車庫県民小劇場。2000円。25日は水上勉の講演も予定されている。

花時計



岡田淳さん  
の学校と  
いうのは  
昼間の活  
気、は

「地方の時代」とは  
世界的な歴史学者として  
て有名なアーノルド・トマス  
インビー氏は、「地球上の  
地域社会の文化・経済・  
政治を支えてきたのは地  
方の都市であり、それは  
21世紀に向つても変わら  
ない」と語っている。  
地球上の地域社会とい  
う言葉は実に堂々として

元来、日本の都市で比較的自立性を内蔵している都市は上方にあつたといわれている。が、今果してどんなものであろうか。世界史を広く深く涉獵した学者が、総括して発言した『地球上の地方の都市』としてお眼鏡にかなわなければ、いくら『地方の時代』だとお題目を唱えても空空虚である。また「文化・経済・政治」という表現も適切だ。文化・経済・政治と

いう三本の柱がバランスを保つて活動しなければエネルギーが生まれてこないということである。これも大切なことである。経済だけが先行しても政治だけが優先してもおかしなことになる。健全な都市の構図は何といっても豊かな生活文化が基本的にしつかりしなければ駄目だと思う。トインビー博士の説く“21世紀を支える地方の都市”というのは、そんな条件を備えた地方の都市であるのだろう△▽△

★アメリカ人のジャック・ボーリー  
・マルーン画伯が、齊屋の墨楽自  
榮氏宅に遊学中。ギャラリー神戸  
時代で、9月1日～31日まで個展を  
開く。

★詩人の鎌木謙さんが、3年ぶり  
に詩集『投影電影』を33部限定で  
梓した。『投影電影』は書肆節社・名古屋  
市名東区神田2丁目75、書店に  
出回る数はないとか。800円  
★彫刻家の廣嶋照典氏の住戸が  
わきました。丁番13 神戸市北区が  
わきました。

KOBE POST





80

暗葉樹

刀禰

と  
ね

絵

／南

和好

喜美子

き  
み

こ

連載小説 〈第Ⅲ回〉

両親の前での木谷は、伸子の裸身の上でバツの悪そうにふっと焰を消した弱さはなく、威儀を以て父に告げていた。その泰然とした木谷をねじりつぶしたい憎悪にかられながら、伸子は黙つて頭をさげてはるより仕方がなかつた。真相は隠されているから、娘の非を託びて平身低頭している父を哀れと思いながらも、どうすることもできない。

三日後に終戦となつた。伸子は停学処分を受けたと思ひ込み、木谷のいつた通りに三週間の謹慎後、学校へ行つてみると、單なる病欠席になつてはいた。木谷が停学処分の手続きを取る暇もなく、世の中が大きく廻転した。

家を焼かれて田舎へ行つてはいる者、死亡した者、怪我をした者、病氣の者など欠席者が過半数で、教師達も欠勤してはいて、伸子の欠席理由など詳く訊ねなかつた。とにかく何もかもが混乱状態で学業などを眞面目に口にするのがおかしかつた。木谷は教練の教官であつたから、もう用なし、と級友達はせいせいしたようにいつた。校内では姿をみかけなかつたことが、伸子の心を和らげた。

アメリカ兵進駐の前に女は山へ逃げなければ、みんな暴行を受けるという噂でもちきりであつた。そのためには疎開先の田舎へわざわざ逃げた友達もいた。伸子は木谷と同じことをこの上は何度受けても大したことじやない、といった捨鉢な気持もあって、三つ編にしていた髪を短く刈り、制帽をまだにかぶつて登校した。男性のような服装をさせられてはいたから、鍋ズミでも塗れば汚らしくて、女っぽい色氣などどこから見てもなかつた。

卒業後は、戦後漸く活氣ついてきた呉服の稼業を手伝つた。古着を集めてきて市で売買する。伸子は父について、それをおぼえた。病身だった母が風邪をこじらせて肺炎であつて亡くなつてからは、主婦代りとしても働かねばならなかつた。食べるだけ一日が過ぎた。買い出しから、それに行くための切符を手に入れる方法から、薪の采配から、水運びから、食べ物を口に入れるまでに日に一日の大半を潰した。人間らしい

★前号までのあらすじ 準看護学校の非常勤講師として働く伸子は戦争中、勤員学生として製薬工場の実験室に配属されていた。終戦の三日前、深い恋心を抱いていた同僚の柴野から主任と副主任の不正を告げられ、彼女は柴野と共に謀してサツカリを持ち出そうとするが発覚する。『退学』という木谷教官の脅しに、彼女は柴野の名を口にしてしまうが、木谷は柴野を助けてやるという口実で彼女を強姦する。

生活するために、どの家庭も夢中で、他人のことに関心を持つゆとりなどなかつた。伸子はそのことでどんなにか救われた。適齢期などと、干渉する者がなかつたから。

十年経つと、いつのまにかウレノコリと呼ばれていた。店も軌道に乗つて支店を持つまでになり、弟が父を助け一人前に商売ができる頃になつて、父は伸子が嫁ぎはぐれたことに気付いた。

「女手がなかつたもので、つい娘をこきつかつてしまいまして。どこかええとこおましたら世話を頼みます」

会う人ごとにいう父を見ると伸子は心が傷んだ。

——結婚を強いられなかつたことを私はむしろ喜んでいるのよ。男はみんなきらいよ。結婚はしたくないの。適齢期に家の犠牲になつたとは思つていいのよ。実はね、木谷という……。

叫びのような告白を父に吐きだしたかった。

伸子はかつて実験室に配属される人は秘密を守らなきやならないのよ、と級友にいわれた時、口が裂けたつて守るわよ、と簡単に言い切つた。だが、追いつめられていざ自分の利と他者の利とのどちらかを選ばねばならなくなつた時、伸子は自分の利をとり、秘密を守りきれなかつた。柴野と名を出しては困るなどの確約を交わしたわけではなかつたが、伸子の失敗で露見してしまつた以上、柴野の名を出さないことを自らに課したのであつた。それを裏切つた脆さとずるさ、自分では意識していないやらしさを、もつともつと内包しているので

はあるまいか、とどんどん内心に心を閉ざしてしまったのであつた。無口になつていつた。いつたん口を開けば何を喋りだすか知れない怖さで余儀なく無口になつてしまつたともいえる。

陰気で無口になつた伸子を、父は父で見当違いの自責から慰めてくれた。クラス会の案内状が来るたびに、行ってこいと勧めるのだが、いつこうに行く気のない娘を見て、「そりやそらうよ。友達はみんな結婚して子供もあることだらうに」と不憫がつた。弟が結婚した機会に、父は小さなマンションを伸子に購入してくれた。

家事一切を弟の嫁に任すと、伸子は急にひまになつた。支店に通うことと、展示会などの催しを手伝うだけとなり、やつと心にゆとりができるクラス会にでも行つてみようかという気になつた。

「十五年振りに、クラス会に行つてみるわ」と父にいうと、わがことのように喜び、呉服商だけに着していく物にも口を挟んだ。

「男と会う時は染めの、華やかな着物がええが——」

「いいだして、父は口尻を苦々しく歪めた。伸子に男気などなかつたことに気付き、しまつたと思つたに違ない。

「女の目のうるさいクラス会なんかは大島紬が一番や」とあとはほそぼそと小さく呟いて、店の反物を剽れた手捌きであれこれ広げた。

最高級品を選んで仕立てさせ、朱色の派手な袋帯を合わせ、バッグや草履にまで気を配つた。

「嫁入り仕度に比べたら安いもんや」と、それを身につけた伸子を店先でいつまでも見送つていた。

「クラス会では、

「さすが呉服屋ほんの娘やね。ええのん着てきて」と羨やましそうにいう友人もいたが、そんな時でも伸

子は“娘”という一字にこだわつた。軽い意味の娘なんか、バージンという意味なのか、友人たちは木谷とのいきさつをどの程度のことと思つてゐるのか、たえずその意識がどこかに潜んでいた。

「ハイミスになつてしまつたもん、着るものぐらい、きばらしてえよ。ほかに何の楽しみもないよって」

伸子は常識的に答えた。毎年クラス会のあるごとに会つてゐる連中は、ウールの着物やセーターといった軽い装いで、話の方に熱中していた。内心伸子の仰々しい格好を虚榮とあざわらつてゐるのかもしれない。

伸子の久しぶりの出現で話題は動員時代のことになつた。

「伸子、あなた運が悪かつたでいうか、どじだつといふか、木谷の視察日に持出したりしてさ。あとから知つたことなんだけれど、学徒でも工員でも門衛を手馴づけて、砂糖、ぶどう糖、味の素、石けんなどをずい分くすねていたそや。私なんか糖衣錠作つてから砂糖を持出したものよ。主任のサツカリん密造も上層部の指令だつたらしいわ。大物ほど表面にはでてこないのね。生真面目つて馬鹿と同義語ね」

その友人は卒業後、動員時のツテでの製薬会社に就職し内部の事情をよく知つてゐた。

あの当時も、それから今まで、級友達がみんな生真面目ななかで、自分一人が持出しなど大胆なことをして学校の名譽を傷つけたと思つて悩んでいた伸子は、頭を一つガンと叩かれたような気がした。和子がいつた。

「私なんかも、薬もらつてきてくれて助かるつて、父にいわれたものよ。医者なのに薬の配給が少なくて困つてから、娘の勤員のお陰で病人が助かるつて笑つてゐたわ。白髪染なんか百姓家のおばあさんにあげると、お米と取り替えてくれて、母などまたもらつてきてねつて気軽にいつたわ。本当はそつたやすくもらえないのよねえ。盗みに行くのよ。徒党を組んで。実験室は秘密の守れる人なんて大そうな人選をするから、実験室の秘密も

洩れないかわり、他の工場のでたらめも入ってこない象牙の塔だったのよ。今でいう情報不足ってこと。私達が要領よく平気でやっていることを、伸子ひとりが罪をかぶったみたいやねって、よくいったのよ」

伸子は十五年目に当時の実態を知らされて、幸いだったのか不幸だったのか、どっちともつかない気持になつた。

「柴野さんっていう人、その後どうしはつたのかしら」

伸子は、今日クラス会に出席した一つの理由になつていることを思いきつてきり出した。

「伸子、知らないの」

「本当は知りたかったのに、わざと聞くのを避けて今日まできたわ」

「まあ、そお。大体、持出しをしたそのことよりも、柴野さんと共に犯だつたことが解つた時の方が私達ショックだつたのよ。ふうーん、そんな仲だったのかつて、ね。羨ましいやら嫉妬いたりもして。それで誰も伸子にいわなかつたのね、きっと。伸子はまるで洞窟にはいったみたいに、学校のどんな会合にも催しにもいつも不参加だつたし。クラス会も今回がはじめてなんだから」

和子の前置きが長いので伸子はいらだつた。

「あの人はね、死にはつたのよ」

「えっ！」

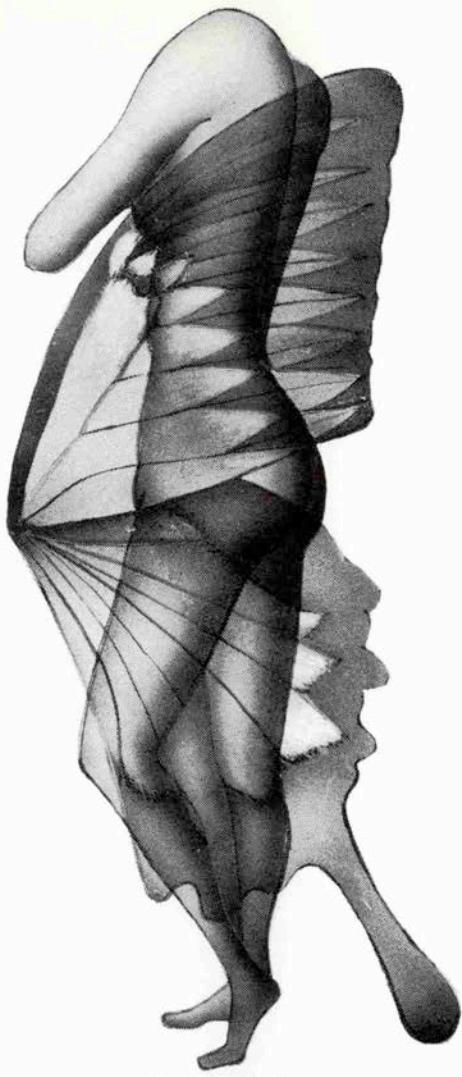
和子の声が急に遠のいた。一切の音が停止した。伸子は空をみつめた。蒼ざめていく伸子の顔色に、あなた、大丈夫、と和子が伸子をゆすった。和子の説明によると、あの翌日、柴野は解雇になり、終戦の前日に自殺したとのことである。

「まあ、前日。終戦になつたのに。犬死！」

伸子はその言葉がのどからほとばしつた。

柴野にしてみれば、病弱で戦争に参加できないことを不名誉だとそれを日頃から苦にしていた上の、解雇である。肺浸潤が相当進んでいて無理して通勤していたが、それも壊んで前途に失望し死を選んだのだろう。

柴野がその後どうしているかは伸子の胸から去らなかつた。今でも実験室で試験管をふつてているのだろうか。それとも薬局でも開業しているのだろうか。いつかは真相を話して、そんな犠牲をはらってくれたの、と慰めてもらうことを想像していた。木谷の乱暴を許したことでも話せる相手は柴野しかない、といつの程にか決めてい



一一一一一一一一一一

た。それが伸子の隠れた潜力となつて、今まで生きてきたようなものだつた。

柴野を救うつむりでしたことが何の効も奏しなかつたことが口惜しかつた。実験室主任は妻を亡くしたあと、副主任と結婚し今では会社の部長になつて活躍している。そうだ。たつた一日のことで戦争が終り、病弱で戦地に征かなかつたことをかえつて幸せだつたと考えなおせる日が来たのに、柴野がどんな心境でどんな状況で死んでいたのか、それに比べて主任の幸運を思うと、暗澹とした憤りがこみあげてきた。

自ら交友を避けていた伸子だつたが、クラス会を機に和子達四、五人との交際がはじまつた。柴野の自殺を知つてから、伸子は木谷に会つて思いつき罵倒なれば、柴野の死が無意味に終つてしまつたといつた気持が昂まつてきた。伸子も彼を死に追いやつた自責に苦しんだ。木谷は伸子の倍も苦しんで欲しい。柴野の名を工場側に通告したのは木谷以外にはない。伸子の怨みは木谷に向かつて凝結していつた。

木谷の消息を伸子は知らない。学校と縁の切れた木谷を探し出す気はなかつた。生きていくための精一杯の何年間に、それでも時々、「それとも、私の女になるか」といつた木谷の言葉を思い出し、訪ねてでもこられたらどうしようといつた薄気味の悪さはあつた。

和子がある日、おどろいた声で電話してきた。  
「木谷先生がね、うちの病院に入院しているのよ。知り合いが入院したので見舞に行つたら、廊下で木谷先生をみつけたの。伸子、会つてみる?」

クラス会の帰途、柴野さんを殺したのは木谷だ、対決する、と伸子が興奮のあまり叫んだのを、和子は覚えていたのだろう。伸子は迷つた。和子の病院は精神科、神経科だけの單科であるから、木谷が患者として入院しているのなら、狂つているのは間違いない。

いつか柴野には会つて謝り、木谷には思いつき面罵したい気持を擦過していく月日があいまに伸子は内燃させてきた。あまり親しくない友人と会つて話す時、むこうからはかつての事件に関して口を切らないが、伸子の方から話題にすると、必ず知つていて噂はかなり広範囲にわたつているようだつた。陰では何をいわれているか解らないやりきれなさを、伸子はいつも味わうのだつた。更にその奥のもう一つの真相にまで話が発展しているのだろうか、そのことはさすがに自分の口からいい出しえないもどかしさを、伸子は何年も抱きかかえていた。地下壕で受けた行為をそつくりそのまま、木谷に返却することが可能なら、伸子の方が優位にたつて木谷を憎伏させたい欲望すらあつた。柴野の死を知つてその気持は強くなつていた。

木谷が狂人になつてゐるかもしれない事実は、伸子の狂暴なまでの憎悪の熱塊に水をかけられたようなものである。躊躇した末、やはりこの眼で木谷を見てやろうと思つた。

病院に着くと、和子は住居と病院とが近いの、といつてもう来て待つてた。

木谷はアル中患者として入退院を繰り返してゐるそうで、今の時間帯は作業病棟で作業中らしいわ、といつた。

「折角來たのだから会つていつたらいいけれど、向こうは誰だか判別がつかないわよ。木谷先生に一度会いたいつていうあなたの気持、解らなくはないけど、過去にこだわるのは明るかつた伸子らしくないわ。古いことは切り捨てないと前進はないのよ」

病院長夫人らしく、ふとり気味で貴禄のある和子の言葉は重みがあつた。伸子は急にみすばらしい自分を感じた。和子は過去にこだわつてゐる伸子をいじましいとして受け取つていいだろ。世の中がどんどん変わっていくなかで、伸子はまだ過去の頸枷くびわからのがれられないでいた。

一飲食店は清潔第一!  
ねずみ、ゴキブリ撃滅大作戦!



- これからのお店の衛生管理はトータルサニテイション（殺菌、防カビ、防殺虫、防ねずみ施工）の時代です。
- 店舗、住宅を微生物（細菌、黴）微細害虫（ダニ、コナタニ類）、衛生害虫（ゴキブリ、ねずみ）、建物害虫（シロアリ、木喰虫）、衣類害虫（イガ、カツオブシムシ）からお守りします。
- 書籍、骨董品、段通、毛皮製品等の保管についてはご相談ください。（相談無料）

三洋化工株式会社

神戸市生田区中山手通1丁目75

電話(391)3195(代)・(331)6619・(321)2727

旅の味わい、旅のこころ  
旅本来のあるべき姿を求めて……  
全国のタウン誌が連帯してつくる

●地域文化のネットワーク

# 月刊 旅行アサヒ

9月号 有名書店で好評発売中

定価 780円 (送料160円)  
年間購読料 9,360円

●地域の新鮮な情報を満載●

9月号では—— 特集/宮崎〈神話のふるさと高千穂〉  
巻頭随想/井出孫六 日本の旅情/「瀬戸内讃歌」  
スケッチの旅/佐藤忠良  
対談/旅三昧・團伊玖磨 vs 朝比奈隆

10月号予告 〈9月15日発売予定〉

●対談/西丸震哉 vs 高峰秀子 ●巻頭随想/田宮虎彦  
●俳人の旅/山口聰子 ●特集/「奈良」



●お問い合わせ、お申し込みは  
神戸市生田区東町113-1  
大神ビル7F  
月刊 神戸っ子  
☎078-331-2246